

江戸時代の茶店

付論・江戸時代の急尾焼・急須(補遺)

西村俊範

はじめに

江戸時代も百年を経過すると三都には数多くの茶店が設けられ、多彩な喫茶の様相が見られるようになった。もちろんそこに至るには庶民が上質の茶を嗜めるだけの経済力をつける過程があり、その庶民に茶が広く受け入れられてゆく過程が必要であった。その過程に沿うように茶店の様相も変化する。本稿ではそのような茶店の様相の変遷を、文献資料のみならず各種画像資料も加えてできる限り両者を照合させながら探ってゆきたい。筆者はこれまでの論考⁽¹⁾の中で、江戸期のお茶の上質化を示す上で重要な指標となる茶笥の減少の問題や隠元茶罐の出現の問題などについてあまり具体的な資料的根拠を示さずに論を進めてきた部分があった。これらの問題は同時に茶店の変遷の指標となる要素でもあるので、本稿にはその補いの意図も込められている。江戸期庶民の飲食文化の理解への一助となれば幸いである。

1. 元禄期まで(～1704)

江戸時代に入って百年の間は茶の普及、特に上質の茶の普及は相当に限られたものであった。必然的に茶店の数も限られていた。『寛保延享江府風俗志』⁽²⁾(寛政4年、1792)には「水茶屋も寛保頃(1741～44)迄は、浅草観音内、神田明神、芝神明、あたご或は両国等に有計にて、町中には無之事也。

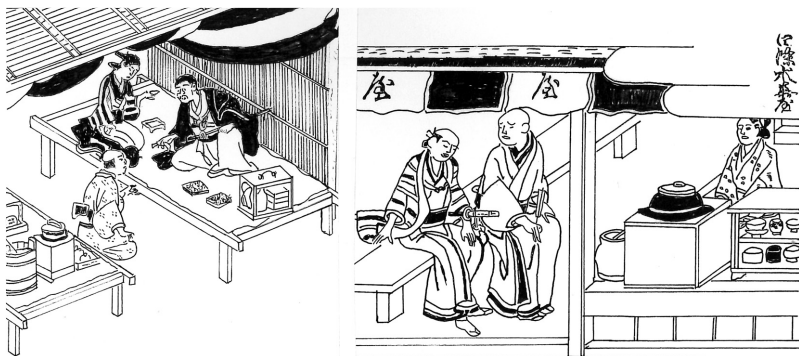


図1 定店・出茶屋(共に西村作図)
 左一『都風俗鑑』(延宝9年, 1681)
 右一江島其磧『風流東大全』(享保16年, 1731)

道路にては何程休度思ひても、右の場所迄も行届かざれば、茶見せは曾て無之事也。たまたまは端々に有所の茶屋といへ共、床几一つ二つに、土へつつみに古茶釜にて、沏茶(晩茶)の事にて有りし。」と記す。つまりよほどの人の集まる繁華地にしかこの風俗志の筆者が考える「茶店と言える茶店」はなく、それ以外は茶店と言うもお粗末なスタイルのものが道端にたまにあるだけだったと述べているわけである。

このまだ数少ない「茶店と言える茶店」は、居付きの定店(図1右)であり、立地も人通りの多い繁華な場所にあつて、板葺き長屋建築の塗家というまともな住宅建築の一角を占めるもので、店先には落間(土間)があつたり、作り付けの腰掛け台を設けたり、座敷端に長床几を出したりして各種喫茶用具をそろえて置いていた。表1に示した通り、この時期の画像資料は書籍類の出版点数の少なさもあつて量的に多くない。それでも、家屋の一角を占める形のまともな茶店の割合が高く、それ以外のものと拮抗している。竈は土間に築かれた土台のうえにあるか、座敷端に据えて置かれたりしていた。座敷に据え置かれる竈の形は樽型が多く、四角型のものは古くは比較的少ない(図2)。それでも延宝(1673~)頃からは四角型の竈が増加傾向にあり、この後は江戸期を通じて四角型竈が主流の位置を占めるよ

表1 茶店の変遷①(寛永～天明期)

西暦	年号	定店	出茶屋	茶筌					竈(かまど)								
									木箱	四角	隅丸	樽	土台				
1624	寛永	4	8	5					—	3	0	4	4				
1644	正保	5	5	7					—	0	1	13	0				
1661	寛文	5	8	8					—	1	4	9	1				
1673	延宝	13	12	15					—	9	6	7	0				
1684	貞享	7	9	11					—	9	3	4	0				
1688	元禄	21	23	38					—	30	2	14	0				
1704	宝永	9	36	5					—	15	7	4	10				
1711	正徳	7	9	1					—	9	2	3	1				
1716	享保	7	33	5					1	27	9	1	1				
1736	元文	3	25	2					湯気薬罐		0	21	2	3	2		
1751	宝暦	6	37	0					腰高台		1	38	7	23	2	3	3
									○	×							
1764	明和	7	51	1	(2)	40	12	43	9	13	16	5	5				
1772	安永	14	39	1	18	14	26	23	18	20	2	5	5				
1781	天明	15	25	2	18	6	21	13	15	4	2	10	3				
1789	寛政	12	40	1	16	8	24	22	12	14	1	7	6				
1801	享和	7	9	0	5	4	8	8	3	6	1	2	2				
1804	文化	13	96	1	68	12	78	23	54	11	4	21	8				
1818	文政	7	44	0	37	8	39	9	21	8	0	11	7				
1830	天保	16	54	0	54	12	52	17	15	22	0	22	5				
1844	弘化																

資料の年代をおおよそ特定することが可能な版本挿絵・浮世絵などを使用している。全ての要素が明確でない資料も用いているので、それぞれの合計数などは一致していない。明和期の腰高台の数は安永期に下る可能性も残る資料なので括弧を付けている。資料の総数が極めて多いために個々の出典を明記できないことを寛恕されたい。



図2 竈各種

左上—四角型，富屋似舩『石山寺入相鐘』（延宝4年，1676），西村作図

右上—樽型，石川流宣『武道江戸紫』（正徳6年，1716），国立国会図書館蔵

左下—土台型，鳥居清満（画）『分福丹頂鶴』（宝暦8，1758），国立国会図書館蔵

右下—隅丸（爐工台）型，中村惕斎『増補頭書訓蒙図彙大成』（元禄8年，1695），国立国会図書館蔵



図3 行灯

左上一菱川師宣『大和名所鑑』(元禄9年, 1696), 西村作図

右上一吉田半兵衛『好色あを梅』(貞享4年, 1687), 西村作図

左下一奥村政信(画)『絵本金竜山浅草千本桜』(享保末頃), 西村作図

右下一山東京伝『絵本復讐煎茶濫觴』(文化2年, 1805), 国立国会図書館蔵

うになってゆく(表1)。

また、道具類に目を向けると、茶筌の表現が認められるものが元禄期までは総じて5割以上に上って、描かれる比率が高くなっている。単純に茶店とわかるように描写するだけで良いのならば釜や茶碗や各種道具の置台・置き棚は必要不可欠な要素と言えるが、小さな茶筌は必ずしも必須アイテムではない。それでもこの比率で描かれているのは、当時の茶店で出していた晩茶(渋茶)をこしらえる必需品と受け止められて、やはり茶店表現

上の必要性が高くて描きたくなる道具だったからであろう。この期の茶店には総じて看板(招牌)の類が見られない。定店では軒に短い暖簾をかける例も見えるが、その暖簾に特に茶店であることを示すものは描かれていない。『大和名所鑑』(元禄9年, 1696)では浅草二十間茶屋の柱の下の方に吊行灯風の看板が描かれており(図3左上), 『赤染衛門栄花物語』(延宝7, 1679)では四条河原の涼み床のそれぞれに、営む店の屋号を入れた置行灯を置いている。これはむしろ客が場所を間違えないようにする配慮が第一義のものであろう。その8年後の貞享4年(1687)刊の『好色あを梅』⁽⁵⁾には定店の長床几の上に同形の行燈が置かれる例が初めて登場する(図3右上)。これらは後の茶店の多くが各種行燈を看板(招牌)として用いるようになることのいわば走りと言える現象である。

2. 宝暦・明和期まで(～1772)

時代が元禄を過ぎると茶店の様相に大きな変化が現われる。まずかなりの比率で描かれていた茶筌の表現が宝永期以降は極端に少なくなってゆく(表1)。この傾向は極めて明瞭で、西村2017で述べた通りである。『嬉遊笑覧』⁽⁶⁾(文政13年, 1830)に辻の茶売りが風炉を据え茶を点てて売る様を評して「是は晩茶を煮て茶筌にてたつる也」と記すように、晩茶販売では必需品であった茶筌が、茶が上質化するとともに次第に不要となっていったからに他ならない。従って画像表現から茶筌が極端に減少する傾向は、販売される茶の上質化を意味していたと解するべきであろう。これ以後明治期に至るまでこの傾向は一貫して継続しており、茶筌の表現は例外的でしかなくなる。一時期の現象ではない。また当然のことながら実際に茶筌を用いて茶を立てている画像も次第に見えなくなって、茶店では『好色亦寝の床』⁽⁷⁾(宝永2年, 1705)あたりが確認できる最後となる(図4)。その時代の有り様を表現する挿絵画像の常として、廃れてゆくものを取えて描く必要性はもはや認められなかったであろう。

一方、茶店本体にも変化が見える。まず。出版文化の発展とともに書籍類の出版点数が元禄期以降に大幅に増加するのに比例して、描かれる茶店の画像点数も著しく増加している。その中で、定店の茶店の画像よりも、住居構造をもたない仮の小屋掛けの茶店(出茶屋)や野天茶店の画像数が、元禄期を過渡期として、比率的に大幅に増加してくる。宝永期以降はほぼ逆転して、以後一貫して定店を凌駕する。これは

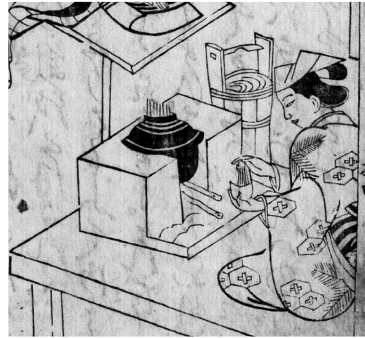


図4 茶筴の使用

佐つき『好色亦寐の床』(宝永2年, 1705), 国立国会図書館蔵

『反古染』⁽⁸⁾(寛政7年稿了か, 1795)に「明和のころより通り町をはじめ、処々に腰かけ茶屋風流、宇治しがらきの匂ひふんぶんたり。」とする記事と符合している。文学作品の画像の茶店の実際の所在地をすべて確定してゆくことはもちろん難しいが、察するに江戸府内の広範な地域に出茶屋が出現して拡散していつていることは確実であろう。

その具体的な構造を探ると、四本の柱だけで壁がなく、簡素な屋根覆いを渡した、四阿屋建か懸崖造りの小屋というべきもので、周囲は葺張り、中に客が腰掛ける長床几と竈とその周辺の道具ばかりがあり、竈にも特別の設えの台はなく、長床几の端に置かれていた。野天のものは長床几と竈ばかりとなる。至って簡素な設えでこれら出茶屋の営業は成り立っていた(図1左, 図2右下, 図5左, 図8中)。これはまさに先述の『寛保延享江府風俗志』で「たまたまは端々に有所の茶屋」として記されたもののそのものと言える。ただし、時代の経過とともにこの出茶屋も立地場所に関わらず次第に小屋とは言いにくいかなりの水準の建築のものが増加してくる。

竈は四角型が以後の主流となり、隅丸型(爐工台型)・樽型のものをはるかに上回るようになってくる。また、これまでの竈は要するに泥の壁土を固めただけの簡素なものであったが、この期から木板を用いて底面と側面



図5 木箱竈①

左—八文字其笑『壇浦女見台』(宝暦3年, 1753), 国立国会図書館蔵
 中—江島其磧『女中風俗玉鏡』(享保17年, 1732), 国立国会図書館蔵
 右—鈴木春信(画)『鍵屋お仙』(明和6年頃, 1769), 東京国立博物館蔵

の下部のみを木枠に嵌める形に四角く囲ったより精巧な作りのものがごく一部ながら登場してくる(図5左)⁽⁹⁾。手前には砂を敷いた浅い張り出し部があり、ここに火箸を突き刺した画像も認められる。また更に進んで側面を側板でほぼ完全に覆う形の木箱入り竈(以後木箱竈と呼ぶ)と称すべきスタイルのものも登場している。『女中風俗玉鏡』(享保17年, 1732)が最も古いもので、宝暦以後に一定数が認められる(図5中)⁽¹⁰⁾。それに次いで明和6年(1769)頃に鈴木春信等が描いた谷中のおせんの茶屋のものがまとまった一群ということになる。春信が描くおせんの錦絵では『欠題中錦作品組物』⁽¹¹⁾と東京国立博物館蔵の2作品にこれが認められる(図5右、表2のNo.50と51)⁽¹²⁾。

この形の竈は江戸では「ヘツツヒ」と呼ばれ、明治に至るまで俗にヘツツイ屋と呼ばれる造竈工という職人が作った。「新撰百工図解—造竈工」⁽¹³⁾(明治34年, 1901)では「市中にては大抵台枠の上に横棧を架し、竹簀等を置き、其の上より壁土を以て築き立て、其の間に瓦若しくは煉瓦を雑へて、堅硬に塗り了り、更に漆喰もて上塗を為し光沢を生ぜしむ。」と記しており、その挿図に見える竈も江戸期の木板箱形囲いのものに大差ない。造り自体もまた大差なかろう。『増補頭書訓蒙図彙』⁽¹⁴⁾(寛政元年, 1789)は隅丸形

のものを「爐工台(ろくだい)」と呼んでいる(図2右下)。^{ひび}鱗が入ったりして破損した竈も出入りの造竈工が修理を請け負ったようで、小さな下層の家では街を流す竈塗りにやらせたと『守貞謾稿』⁽¹⁵⁾は記している。

1章で引用した『寛保延享江府風俗志』⁽¹⁶⁾(寛政4年, 1792)には、「今の如く奇麗に成りたる初は、芝切通しに一ぶく一銭とて、唐銅茶釜をたぎらかし、其蓋りりんりと鳴し、茶碗等より奇麗れいして、況や茶葦久保宇治等を用ひたる事也。夫より諸々沢山出来たる事也。延享(1744~48)の末に新橋朝日といへる見世出来、又其頃にしがらき杯出来て、此頃より下々にても上茶の飲み覚えて、殊外はやり……」と記している。この時期に茶店があらゆる面で小奇麗になって、茶も上質化し、茶店数も増加していった様相が見て取れる。まさに画像に見える様相にほぼ合致している。

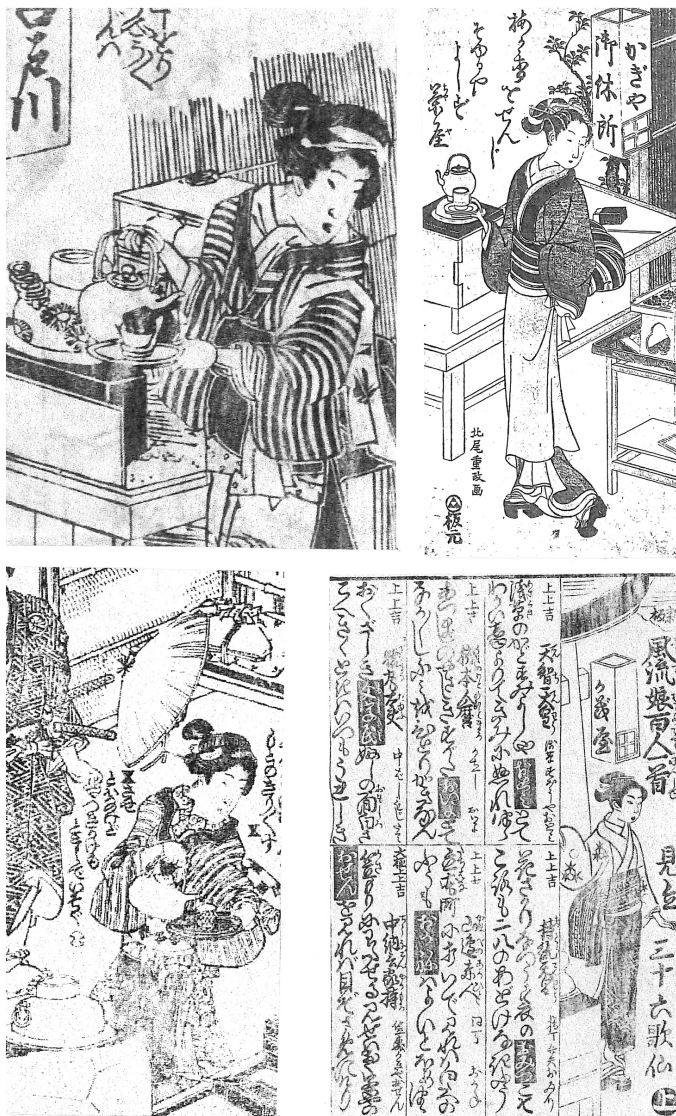
また行灯を用いた看板(招牌)もこの時期から増加して、店の設えの一部⁽¹⁷⁾となってゆく。「享保十九京姉川座評判記(仮題)」(享保19年, 1734)では定店の座敷端に屋号の書かれた置き行灯が竈と並んで置かれ、『絵本金龍山浅草千本桜』⁽¹⁸⁾(享保末頃)の浅草二十軒茶屋では屋号を記した懸け行灯風⁽¹⁹⁾のものが定店の柱に掛かる(図3左下)。宝暦期からは掛け行灯に「おせんじ茶」・「御休所」・「しがらきちゃ」・「大和茶」などの文字も見えるようになってくる。このうち「おせんじちゃ」「御休(息)所」の二つは以後明治期に至るまでの掛け行灯の常套句となる(図3右下)。看板においても茶店のスタイルがこの期に定まったと言える。

『守貞謾稿』⁽²⁰⁾では看板について「江戸にては茶見世ともあるひは水茶屋とも云ふなり。屋号には『源氏』巻名のごとき物多し。掛け行灯にその名を書し、あるひは御待合所・御休息所などと書きたるもあり。」と記し、同じく巻之十では「水茶屋と云ふ売茶店は、特に長きを専らとす。水茶屋には屋号のものこれなし。必ず風流の名を称す。あるひは三方に右の名を記し、あるひは一方に御待合所、あるひは休息所など書くもあり。」と記している。

3. 安永期以降(1772～)

明和期を過ぎて安永期に入ると、表2に示される通り茶店の体裁にさらに大きな変化が生じる。一つは湯気薬罐の盛行であり、二つは腰高台の出現であり、三つ目は三側面の大部分を木版で覆った木箱竈の盛行である。なお、この湯気薬罐は従来筆者が隠元薬罐と呼称していたもので、西村2014では論文タイトルにも用いた。⁽²¹⁾ただし、西村2019で隠元禅師の茶について考究したところ、この両者は『本朝世事談綺』で「隠元薬罐」の項目にまとめて述べられているものの、別物と考えざるを得なくなった。そこで、より正確な湯気薬罐の名称を今後は用いるようにしたい。急な変更をお詫びしたい。

西村2014で示したように、明和6年(1769年)に江戸・谷中のおせんの茶屋に湯気薬罐が登場する。竈に懸けられた茶釜の口の上に薬罐が乗るようになる。このような薬罐は西村2019で述べた通り、裕福な商家などで18世紀前半には出現していたもので、上茶に関わるものと考えられる。『春霞ゆるしの廓』⁽²²⁾(天保3年, 1832)や『犬の草紙』⁽²³⁾(嘉永2年, 1849)では茶釜から降ろした湯気薬罐から茶碗に注ぐ光景が描かれている(図6左上・左下)。茶漉しが茶碗に載せられる画像では漉し茶と茶漉しの違いが不明確であるが、茶漉しが見えない場合は薬罐の中身は茶であった可能性が高くなる。湯気薬罐の茶店への登場は時期がいささ遅れていて、宝暦10年(1760)のものが古い例である。⁽²⁴⁾鈴木春信などが盛んに描いた谷中の茶屋娘・おせんの錦絵などには、この薬罐があるものとないものとが含まれており、結果として明和6年(1769)がおせんの茶店での湯気薬罐の出現時期であろうと西村2014では考察した(図6右下)。1・2年の違いを求めるような細かい出現時期の特定作業に特に大きな意義があるとは考えておらず、重要なのはむしろこの時期を契機とした全体の傾向の変化であろう。ともあれ以後の安永期からは茶店の画像の半数以上に湯気薬罐が描かれるようになる。こ



左上―五柳亭徳升『春霞ゆるしの廓』（天保3年、1832）、国立国会図書館蔵
 右上―北尾重政（画）『かぎやおせん』（明和後期、東京国立博物館蔵）
 左下―笠亭仙果『犬の草紙』（嘉永2年、1849）、大阪府立中之島図書館蔵
 右下―森島中良『寸錦雜綴』（文化頃）所収、国立国会図書館蔵

図6 湯気薬罐

の傾向は文化年間以降(1804～)はさらに顕著になって、描写比率は8割を超える。上茶の普及と湯気薬罐は密接に関連すると見て疑いない。

また、この湯気薬罐からはごく僅か遅れて、木製の腰高台が茶店に登場する。この腰高台はそれまでは茶店の客が腰掛ける長床几の端に置かれていた竈や茶碗棚などを載せるための専用台であり、それまでのある意味雑然としていた店内部の有様が整然と分けられて機能的にもなったことを意味している。西村2019で述べた通り、腰高台の絶対確実な初現資料は『絵本虚言弥二郎傾城誠』(安永8年、1779)(図7右上、表2 No.26)のものであるが、北尾重政と一筆斎文調に遡る可能性のある浮世絵がある(図7左上・左下、表2 No.56・61)。ともに腰高台の上に木箱竈が載ってさらにその上に湯気薬罐が載るという、それこそ新たな様式の茶店を絵に描いたような絵である。文調のものは茶屋娘が安永から寛政期に流行した歌謡「めりやす」の教本を見ており、その点からも安永期に下る可能性がある。北尾重政のものは「かぎ屋」の掛け行灯を柱に掛けたおせん茶屋の絵と考えられる。同じ重政でも図6右上では腰高台を描かない。但し、共に娘の髪型が燈籠髷ではないので、下っても安永前期までと言える。腰高台も湯気薬罐同様に文化年間以降はさらに顕著に描写比率が増加している。

次に、明和期まではまだ例外的だった木箱竈が急激に増加し、安永期以降は三分の一を占めるまでになっている。櫺の板が用いられたと思われ、美しい木目が目を引く。これが茶店の美観の向上にも一役買っていた事は間違いない。木箱竈も前2者同様に文化年間以降に描写比率が急増している。

この明和・安永期の浮世絵・版本挿し絵に見える湯気薬罐・木箱竈・腰高台の3要素を3グループに区分して表2にまとめてみた。⁽²⁵⁾上段の明和期①②・安永期は浮世絵以外の出版物に見えるものである。刊行年代の明確な刊本のものを集めた。明和期①と②には湯気薬罐(②期 No.9、図6右下)・木箱竈(①期 No.2、図8中)はごく稀で、腰高台は例を見出せなかった。これらが安永期に入るとかなり増えてくる。3要素が全て揃うものも安永



左上——筆齋文調(画)『みなとや』(安永前期)、太田記念美術館蔵
 右上——市場通笑『絵本虚言弥二郎傾城談』(安永8年、1779)、国立国会図書館蔵
 左下——北尾重政(画)『かきやおせん』(安永前期)、西村作図
 右下——鳥居清長(画)『桜川お仙』(安永6年頃、1777)、西村作図

図7 腰高台

明和①期(1766～68)

版 本 挿 絵 他	No.	1	2	3	4	5	6	7	8	
	年 代	明 和 3	4	4	5	5	5	5	5	比 率
	湯気葉罐	×	×	×	×	×	×	×	×	0/8
	木箱竈	×	○	×	×	×	×	×	×	1/8
	腰高台	×	×	×	×	×	×	×	×	0/8

明和②期(1769～72)

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
明 和 6	6	6	6	6	6・7	7	7	7	8	9	比 率
○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	1/10
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0/10
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0/10

A群(1768～)

浮 世 絵 ・ お せん	No.	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	
	年 代	明 和 5 以 降	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	6	6	6	6	6 以 降	6 以 降	比 率
	湯気葉罐	—	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×	×	—	×	×	—	×	0/17
	木箱竈	—	—	—	—	×	×	×	×	×	×	×	×	—	×	×	×	×	0/17
	腰高台	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0/17

表2 茶店の変遷②(明和～安永期)

明和期から安永期にかけての茶店を描いた資料から、湯気葉罐・木箱竈・腰高台の3要素のみを取り上げている。上段(版本挿絵などの浮世絵以外のもの)・中段(谷中のおせんの茶屋の浮世絵)・下段(おせん以外を描く浮世絵)に分けてまとめた。中段のA・B群の区別は時期差ではなく、3要素の特色がすべて古いタイプをA群に、いずれかが新しいタイプをB群にまとめた。B群と下段の甲群には実際の製作時期が安永期になる可能性のある資料を一部含む。それぞれの出典は本文注25を参照。

8年から出てくる。ただ、残りの2グループと比較すると、明和期には茶店の表現に3要素をほとんど描いておらず、総じて古様に描写していると言える。慣習的な表現が踏襲されている可能性が見える。

表2下段の甲・乙群には浮世絵の茶店・茶屋娘の画像のうち、谷中のおせんの茶屋以外のものを集めた。乙群の安永期のものはほとんど刊年が分かるもので、3要素すべてが表現される例が増えて、安永6年頃の例(乙群No.69、図7右下)が最も古い。甲群は乙群よりも古い明和期中心のもので、いずれも刊年はおおよその推定である。茶屋娘の浮世絵は鈴木春信描

安永期(1772～80)

19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
安永 元	元	3	3	4	6	6	8	8	8	8	9	9	比率
×	×	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○	8/13
×	×	×	×	○	○	○	—	○	○	○	○	○	8/13
×	×	×	×	—	×	—	○	○	○	○	○	○	6/13

B群(1769～)

49	50	51	52	53	54	55	56	
6 以降	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	比率
×	×	×	○	○	○	○	○	5/8
○	○	○	×	×	×	○	○	5/8
×	×	×	×	×	×	×	○	1/8

甲群(1769～)

	No.	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	
浮世絵・おせん以外	年代	明和 6以降	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	比率
	湯気薬罐	×	○	○	○	○	×	—	○	○	○	8/11
	木箱竈	○	×	×	×	○	×	○	○	×	×	4/11
	腰高台	×	×	×	×	○	—	—	○	×	×	1/11

乙群(1772～80)

67	68	69	70	71	72	73	74	
安永 元	2	6 以降	6 以降	8	8	安永 後期	安永 後期	比率
×	○	○	—	○	○	○	○	6/8
×	○	○	○	○	○	—	○	6/8
×	×	○	○	×	○	○	○	5/8

く谷中のおせんのもの⁽²⁶⁾がその先鞭をつけており、その年代は明和5年後半以降とされる。従って、この甲群はまずは明和6年以降9年までのもので、一部は安永期に入るものも含まれていると考えられる。湯気薬罐を描く例が多く、木箱竈と腰高台の例が少ない点が特色と言える。甲群から乙群の間に、つまり明和後期から安永期に3要素が揃う茶店が急激に一般化した様相が窺える。

表2中段のA・B群は鈴木春信が中心になって描いた谷中のおせんの茶屋の画像のグループである。いずれも年代はおおよその推定である。A群



図8 木箱竈②

左——筆斎文調(画)『かぎやお仙』(明和6年, 1769), 早稲田大学演劇博物館蔵

中——二世八文字自笑『今昔九重桜』(明和4年, 1767), 国立国会図書館蔵

右——南鐐堂一片『寸南破良意』(安永4年序, 1775), 国立国会図書館蔵

は3要素が含まれないものだけを集めたものである。時期的には大半は鈴木春信がおせんを描き始めた明和5年後半から6年の前半のものと推定される。就中, A群のNo.47は新藤茂氏が明和6年4月のものと考察している⁽²⁷⁾。これに対してB群には3要素のいずれかが描かれるものをまとめた。このうちNo.49(図8左)は新藤茂氏が明和6年3月のものと考察されたものである⁽²⁷⁾。B群はA群と時期的に重なるものを含みながらも、時期的に新しいものを中心になっているとみられる。おせんは明和7年2月に結婚引退して騒ぎとなる。ただ、それ以後もおせんの人気自体は全く衰えておらず、B群の中には結婚引退以後の明和7年以降のものやさらに安永期にまで下るものも含まれていることを想定しておくべきであろう。ちなみに鈴木春信は明和7年6月に死去している。全体的傾向としてはB群と甲群の様相は相当似通っていると言える。やはり共通して腰高台の例が少ない。

以上、煩雑さを避けるために3グループに分けて分析した。安永期にこの3要素が全て揃う普及し始めていること、遡ってその普及の端緒はその数年前の明和6年前後から始まっていること、そして浮世絵以外の出版物の明和②期のものは、同時期の浮世絵の表現に比べて随分と保守的で古様な茶店表現に終始していることなどが浮かび上がってきた。逆に言えば、浮世絵の表現は細部まで時代性を極めて鋭敏に反映したものであったと言え換えることができる。総じてみれば明和後半期から安永前半期、1760年代後半から1770年代前半のせいぜい10年ほどの間が茶店の様相が大きく変化する時期に当たっていたことが確認できたこととなろう。湯気薬罐・腰高台・木箱竈すべての茶店への出現時期が、偶然にも人気茶屋娘(特におせん)が浮世絵に数多く描かれた時期とほぼ合致していた事は、江戸期の茶の研究にとってはまさに僥倖としか言いようがない。裏を返せば、人気茶屋娘のいる茶店こそ当時最高の庶民の人気スポットであり、それが実物であろうと浮世絵であろうと最先端のトレンドを最初に取り入れる場所にも必然的になっていたと解するべきであろう。

一方茶店の形態に触れると、小屋掛けの出茶屋の総体の様態は、以上の三要素を含めてこれ以後明治期に至るまで基本的に変化が認められない。その期間は実に100年以上に及ぶ。『雪月花三遊亭新話』⁽²⁸⁾(明治12年, 1879)や『艶娘毒蛇淵』⁽²⁹⁾(明治13年, 1880)に見える小屋掛けの茶店(図9左)も、腰高台の上に竈と湯気薬罐と茶碗棚が載り、柱の掛け行灯には「せんじ茶」や「御休所」の文字が見える。『神経闇開化怪談』⁽³⁰⁾第1号(明治17年, 1884)では満開の桜と釣り提灯の下に腰高台の上の竈と客の腰掛ける長床几が見える。これらの明治10年代の茶店の画像は、散切り頭の人物がいなければ時代の判定に困るほどに見事に伝統的なものである。『東京朝日新聞』⁽³¹⁾(明治32年8月4日)には、「避暑法」という記事があり、「道灌山の掛茶屋で滝を浴び、しばらく寝ころぶ。茶代凡そ五銭。」と記している。これも伝統的な茶店の様相であろう。日本における本格的なカフェの誕生は明治40年代以降であるので、伝統的な茶店の終焉は明治後半以降のこととなろう。



図9 茶 店

- 左一柳水亭種清『艶娘毒蛇淵』
(明治13年, 1880), 早稲田
大学図書館蔵
- 右一為永春水『春色梅美婦禰』
(天保12年, 1841), 国立国
会図書館蔵
- 下一山東京伝(画)『名取菊黄白
長者』(安永8年, 1779),
国立国会図書館蔵

また、定店の方はこの期に入ると一段と美観を整えて機能的な店構えになってくる。『名取菊黄白長者』⁽³²⁾(安永8年, 1779)や『水茶屋の女と男客』⁽³³⁾(鳥居清長筆, 安永後期)・『廓中丁子』⁽³⁴⁾(天明5年, 1785)・『和合人』⁽³⁵⁾(文政・天保期)・『春色梅美婦禰』⁽³⁶⁾(天保12, 1841)では、家屋の表が落間になっており、客が腰掛ける場所として専用の作り付けの腰掛台が頻出する。座敷の手前にせり出すように作るものや横壁沿いに作るものなどがある。上には絵筵が敷かれ、まさに憩いの場という体裁を整えている(図9右・下)。

『皇都午睡』⁽³⁷⁾(嘉永2年, 1850)はその有様を「京摂に目馴れぬ物は江戸の市中の商人店と並び居る茶店なり。…そのさま表の間は落間多く、床几腰

掛に絵筵を敷き、中央に朱塗の竈に真鍮の罐子をかけ、環は渦巻にして三尺計りも高く巻あげ、暖簾・軒釣の提灯には信楽・寿・菊など、通り名を紅にてしるし、…」と描写している。

以上、大約3つの時期に区分して茶店の移り変わりを叙述した。総じてみて、18世紀前半に茶店が江戸市中に広まり、18世紀半ば過ぎにその様相が整備されて小綺麗になり、19世紀に入るとその傾向に一層の拍車がかかっていたとまとめることができよう。茶店の様態は茶の庶民への普及度合いに沿う形で変遷し、茶筌や湯気葉罐以下のものがその重要な指標となっていることがその特色として指摘できよう。

4. 香 煎

香煎は添加される材料が多様なために種類が多い。基本的に穀物の粉末に各種の香料と塩を加えたもので、湯に振りかけて飲用に供した。京都府内務部『京の華』⁽³⁸⁾（大正15年）によると、元禄14年(1701)に赤穂浪士の原惣右衛門が医者⁽³⁹⁾の山脇道三から製法を学んで京祇園で広く製造販売を始めたものとされる。とすればもとは薬に類するものになり、室町期の「煎じ物」に近いとも言えよう。『拾遺都名所図会』⁽⁴⁰⁾（天明7年、1787）にも祇園の名産として登場し、『東海道名所図会』⁽⁴¹⁾（寛政9年、1797）には賑わう店の様子が描かれている。『美目与里草紙』⁽⁴²⁾（弘化4年、1847）や『淀川兩岸一覽』⁽⁴³⁾（文久元年、1861）には京名物の一つとして香煎の画像がある。

但し、『人倫訓蒙図彙』⁽⁴⁴⁾（元禄3年、1690）には「祇園香煎其名高し江戸浅草すは町柳屋、糸桜と名付。」とあって、祇園の名産とはされるが時期的には元禄よりもさらに遡るようである。

その容器は円筒形の筒型容器の端に近いところに穴をあけて捻り栓を付けたもので、「容器は若竹五寸余の筒に節を存して底とし捻栓を以て蓋と為し或は陶製の小壺を用ふ。」という『京の華』⁽⁴⁵⁾の記載と合致している（図8右、図9右、図10右）。『守貞謾稿』⁽⁴⁶⁾には蕃椒粉売りの項に「七味蕃椒と号



図10 香煎

左—山東京山『教草女房形気』(弘化3年, 1846), 大阪府立中之島図書館蔵
中—敬川国芳(画)『江戸名所草木づくし 品川八景坂のもみち』(天保～弘化), たばこと塩の博物館蔵

右—伊庭可笑『通風伊勢物語』(天明2年, 1782), 国立国会図書館蔵

して、陳皮・山椒・肉桂・黒胡麻・麻仁等を竹筒に納れ、鑿をもってこれを突き刻み売る。」とあり、容器の形が完全に一致しており、両者の親和性が窺える。

香煎の画像は大半が茶店の茶碗棚の中に、茶碗や茶壺と併せて描かれる。『東海道駅路の鈴』⁽⁴⁶⁾(宝永6年, 1709)では藤沢近辺の茶店の棚に見え、以後も幕末まで確認できる。『教草女房形気』⁽⁴⁷⁾(弘化3年, 1846)・『江戸名所草木づくし(品川八景坂のもみち)』⁽⁴⁸⁾(天保14～弘化3年, 1843～1846)・『西国奇談』⁽⁴⁹⁾(安政6年, 1859)では、茶屋娘が片手に持った盆の上の茶碗に香煎を振りかけている画像がある(図10左・中)。特に『教草女房形気』では茶釜の蓋が開けられて湯気が立っており、そのすぐ真上に近い位置に盆がある。横の茶碗棚に茶店の画像としては大変珍しく土瓶が置かれているので、おそらく茶釜の方で沸かしていたのは茶ではなく湯だったと思われる。茶店では、釜のうえに掛けられる湯気薬罐以外に別の薬罐が描かれることは

極めて少ない。本来はこの土瓶が釜の上に載せられていたのであろう。弘化期にもなれば茶店が供する茶に茶釜で煎じた番茶はまず考えられない。従って、茶釜は既に完全な湯沸かしの用途になって香煎にも利用されていたと思われる。

江戸で香煎が普及した時期は詳らかではないが、『富貴地座位』⁽⁵⁰⁾（安永6年、1777）に下谷池之端仲町の酒袋加兵衛が「気のあっさりとする香煎」と評価されてランクされている。『通風伊勢物語』⁽⁵¹⁾（天明2年、1782）と『浅草金竜山八境・柳屋』⁽⁵²⁾（天明・寛政期）では楊枝店と思われる店先に並んで見える（図10右）。三田村鳶魚氏は『江戸の女』⁽⁵³⁾の中で「いずれにしても天保以後の水茶屋では、御客さんを見かけて、茶釜の中の煮くたらかしの茶を酌んで飲ませるやうなことは無い。先ず香煎とか、ユカリとかいふものを持って出て、暫時にして御煮花という順序だったやうで」と記している。ましな茶を飲ませようとすると、煮立った湯を酌んでさっと淹れてすぐに出せないの、まず手早く熱湯で差支えの無い香煎などで時価稼ぎをして勿体を付けておいて、二重に出すことであわよくばお茶代も多く取れるのだと述べている。ただ、香煎は天保以前も多く描かれている。天保以前の、茶店の茶が茶釜で煎じる煮くたらかしの番茶中心だったところに香煎を具体的にどのように供したのかはよく理解できない部分がある。

香煎も明治期に引き継がれる。『都の魁』⁽⁵⁴⁾（明治16年、1883）の香煎商之部にも原惣右衛門の系譜をひく大店が掲載される。『鶴殺疾刃包丁』⁽⁵⁵⁾（明治20年、1887）の挿絵にも長火鉢脇で手持ちの茶碗に香煎を振りかける女の姿が描かれている。香煎は今に続く風習である。

付論 江戸時代の急尾焼・急須(補遺)

急尾焼・急須に関する問題について西村2020において取りまとめて記した。ただ、新型コロナウイルスの影響が確実にあって資料収集が思うに任せず、重要な資料をいくつか見逃していたことに気付いて大変後悔をして



図11 京・五条の陶器店
梅廼屋鶴子編『絵本三都名所一覧』(天保～嘉永)、国立国会図書館蔵

いる。迅速な補足・訂正が必要と認識したので、不規則な形ではあるがこの場を借りて補わせて頂きたい。

まず、西村2020では、売茶翁が使用した横手棒状の取っ手を持つ急尾焼の入手先として長崎の可能性を示していた。実際に横手棒状の取っ手を持つ急尾焼が長崎市内から出土した発掘報告が既にある。唐人屋敷跡⁽⁵⁶⁾の出土で、唐人屋敷が建設された元禄2年(1689年)の整地層の下からの出土品である。報告書は来日人数が急増して長崎市中の宿町で対応できなくなってこの地近くに滞在していた中国船員や積戻船員たちの手回り

品と考察している。従って17・18世紀などの段階では、このような急尾焼は正規の輸入商品ではなく、長崎への持ち込み数もごく少数に止まったはずである。売茶翁の急尾焼が突出して古く見えた事情もこのあたりにあったと類推できよう。

唐人屋敷の発掘を担当された扇浦正義氏は、引き続き長崎に持ち込まれていたはずの横手棒状の取っ手を持つ急尾焼が売茶翁によって取り上げられた可能性を既に提示されておられた。また、売茶翁の急尾焼が遺品として⁽⁵⁷⁾木村兼葭堂に伝わり、さらに交友のあった青木木米の作陶の手本となっ

て現在に至ると考えられた。この点については筆者の見解は西村2020に記したとおりである。『絵本三都名所一覽』⁽⁵⁸⁾（天保～嘉永）には洛東・五条坂の五條陶物師の店先に横手棒状の取っ手を持つ急尾焼が炉と並んで陳列されている（図11）。清水焼の系列での一般への普及が注目される。

18世紀の急尾焼の画像例の追加は以下のとおりである。

明和 6 年(1769)	後ろ手	炉上	上方	『休息百人一首』喜撰法師 ⁽⁵⁹⁾
明和 8 年(1771)	後ろ手	炉上	上方	三代吉文字屋市兵衛『女芸文三才図会』一・五編 ⁽⁶⁰⁾
天明頃	後ろ手	炉上	江戸	宝嘉僧『誰が袖日記』 ⁽⁶¹⁾
寛政12年(1800)	？	炉上		成三楼酒盛『滝川全伝 雪乃梅』下冊 ⁽⁶²⁾

この追加も明確なものはすべて後ろ手棒状の取っ手の例で、前稿で指摘した18世紀における「後ろ手棒状」の圧倒的優位の傾向には何ら変わりがない。

また、19世紀における急須という語の用例を 4 例追加しておく。

1. 「急須（フリガナは「きふす」）」
四世鶴屋南北『浮世柄比翼稲妻』三幕目⁽⁶³⁾ 文政 6 年(1823)
2. 「急須」
井関隆子『井関隆子日記』天保11年 1 月分⁽⁶⁴⁾ 天保11年(1840)
3. 「キヒシヨ」・「急須」
田中本家蔵 道八作赤壁之図急須への貼り紙・証書⁽⁶⁵⁾
天保13年(1842)
- 「急須」 田中本家『萬大宝恵帳』（嘉永元年，1848）
「急須」 田中本家『当座仮帳』（文久元年，1861）
4. 「急子」
喜田川守貞『守貞謾稿』卷之十八(嘉永 6 年序，1853)，喜田川守貞『近世風俗志(三)』（岩波文庫，1999年）123頁



図12 後ろ手棒状の把手を持つ煮沸器具

左上—『点石斎画報』丙集(光緒年間) 左下—『民呼日報』(宣統元年, 1909)
 中上—『点石斎画報』戊集(光緒年間) 中下—『点石斎画報』亥集(光緒年間)
 右上—『点石斎画報』丁集(光緒年間) 右下—『賞奇画報』(光緒32年, 1906)

急須という言葉の用例が江戸時代には極めて少ないことに変わりはない。

最後に、問題を残していた後ろ手棒状の取っ手を持つ急尾焼の来源の問題について述べたい。清末の上海で申報館が発行した絵入新聞に『点石斎画報』がある。期間は光緒10年から19年(1884~93)までで、場所柄もあって、上海を中心に中国南半部に関する記事が中心となっている。この中に後ろ手棒状の取っ手を持つ煮沸器が描かれる例が複数認められる⁽⁶⁶⁾。いずれも炉の上に掛けられて描かれている。但し、その用途は背景描写の一部に過ぎないために詳らかではない。19世紀末のものであり、直接茶を煎じていた可能性は少ないかもしれない。

『点石斎画報』の記事に描かれる人物の生活地・出身地の記述があるので見ると、江蘇省秣陵(南京, 図12左上)・浙江省湖州(図12中上)・安徽省祁門(図12右上)・粵東(広東省東部, 図12中下)などがあり、他に特に記載のない上海の話と考えられるものがある。また、上海で発行された「申報新報」や「民呼日報」・「清代画報」の宣統元年(1909)刊分⁽⁶⁸⁾(図12左下)や、広

東・広州で発行された「賞奇画報」の光緒32年(1906)刊行分(図12右下)にも同類が炉上に描かれている。従って、福建周辺の江蘇(上海を含む)・浙江・広東では、後ろ手棒状の取っ手を持つ煮沸器が19世紀末の時点では確実に存在しており、それぞれの地域で時期的に遡っての存在も十分想定できるわけである。

西村2020図8では後ろ手棒状の取っ手の煮沸具を日本国内で中国人が使用している画像を紹介した。長崎には福建船以外にも江蘇(南京)船・浙江船も来航している。『清俗紀聞』⁽⁶⁹⁾(寛政11年, 1799)にも同類の後ろ手棒状の取っ手を持つ煎薬器が江南浙江地域の風俗として紹介されている。また。開港期の横浜に在住する中国人はイギリス人などが買弁として連れてきた広東や上海の人間が多かった。この点では『点石齋画報』などの画像と地域的に符合していて矛盾がない。となれば広東省東部のものを広東船が齎した可能性も残しておきたい。長崎・勝山町遺跡から、注ぎ口と取っ手が同じ方向にねじ曲がった不思議な形の煮沸器が出土している。⁽⁷¹⁾同類が『椿椿山日記』天保8年の条にも見えている。⁽⁷²⁾この煮沸器について森達也氏は広東省中部の窯業産地である石湾で類品が現在に至るまで生産されていることを確認された。⁽⁷³⁾おそらく当時幅広い地域で交易をおこなっていた広東船によって齎されたことが想定される。であれば、広東省東・中部地域の産品も当然長崎に流入していて不思議ではない。西川如見は『華夷通商考』⁽⁷⁴⁾(宝永6年, 1709)巻二の広東省の項で「此国ノ中ヨリ舟仕出ス所々如左」と記してその中に広東東部の潮州府を挙げ、「長崎ニ来ル人多シ」と記している。この後ろ手棒状の取っ手を持つ煮沸器の来源に関してはまだまだ未解決の研究課題と言わざるを得ないが、いずれにしても来源は中国にあって、18世紀までに長崎経由で将来されたものと見てよからう。

最後に前稿第7章で述べた茶注ぎの類例を追加しておく。

1. 墨川亭雪麿『咲替薨日記』初編上(嘉永3年, 1850), 早稲田大学図書館蔵
2. 歌川貞景(五湖亭)『茶屋娘』(天保期), 佐藤要人『江戸水茶屋風俗

考』(1993年)口絵カラー図版

3. 為永春友『春色鶯日記』3編上(天保頃), 早稲田大学図書館蔵

注

- (1) 西村2014 「笠森お仙と隠元薬罐」『人間文化研究』第32号
西村2016 「江戸後期庶民のお茶」『人間文化研究』第37号
西村2017 「桃山〜江戸中期, 庶民のお茶」『人間文化研究』第39号
西村2018 「江戸時代の喫茶道具」『人間文化研究』第41号
西村2019 「江戸時代の上茶」『人間文化研究』第43号
西村2020 「江戸時代の急尾焼・急須」『人間文化研究』第45号
- (2) 著者不詳『寛保延享江府風俗志』(寛政4年, 1792), 続日本随筆大成編集部編『続日本随筆大成』別巻巻8(1982年)19頁。越智久為「反古染」も「享保の半頃迄, 浅草観音へ丸之内より出る其途にて, 値を出し食事せん事思ひも寄らず, 煎茶もなく……」と記す。越智久為「反古染」(寛政7年稿了か, 1795), 『続燕石十種』第1冊(1908年)180頁。
- (3) 菱川師宣『大和名所鑑』上之巻(万屋清四郎刊), 曲亭馬琴『燕石雑誌』巻之三(文化7年, 1810)に引用する。塚本哲三編『骨董集・燕石雑誌・用捨箱』(有朋堂文庫84, 1918年)398頁。
- (4) 「赤染衛門栄花物語」(延宝7年, 1679), 古浄瑠璃正本集刊行会編『古浄瑠璃正本集加賀掾編』第一(1989)416頁。
- (5) 吉田半兵衛「好色あを梅」巻一(貞享4年, 1687)十八葉オモテ, 『古典文庫』第462冊, (1985年)37頁。
- (6) 喜多村筠庭「嬉遊笑覧」巻10(文政13年, 1830), 岩波文庫『嬉遊笑覧』(四)(2005年)361・362頁。
- (7) 奥村政信(画)「好色亦寐の床」巻五(宝永2年, 1705), 国立国会図書館蔵。一般家屋では, 享保頃の例がある。近藤清春(画)『どうけ百人一首』, 中村幸彦・日野龍夫編『新編稀書複製会叢書』第12巻(1990年)227頁。思文閣出版『思文閣古書資料目録』第178号(2002年)169頁図版69。
- (8) 越智久為「反古染」(寛政7年稿了か, 1795), 『続燕石十種』第1冊(1908年)180頁。
- (9) 八文字其笑・瑞笑『壇浦女見台』三之巻(宝暦3年, 1753), 八文字屋本研究会編『八文字屋本全集』第20巻(1999年)488頁。同様のものはいくつかの例がある。鳥居清満(画)『浮絵両国涼図』(宝暦末), L. ヒックマン『浮世絵聚花』巻1(1983年)図版52。石川豊信『両国涼見三幅対』(宝暦頃), たばこと塩の博物館編『浮世絵版画図録編』第一部(2011年)図豊信2。和祥『恋紅染』上巻(宝暦12年, 1762), 国立国会図書館蔵。

- (10) 江島其磧『女中風俗玉鏡』(享保17年, 1732)。八文字自笑『今昔九重桜』(宝暦10年, 1760), 八文字屋本研究会編『八文字屋本全集』第22巻(2000年)185頁。甘笑『花重連理の鳥兜』(宝暦10年序, 1760), 早稲田大学図書館蔵。
- (11) 鈴木春信『欠題組物のうちお仙と客人』, 林美一編『春信・湖龍斎』(江戸艶本集成第2巻, 2011年)4頁。林綾野『浮世絵に見る江戸の食卓』(2014年)96頁。
- (12) 鈴木春信『笠森おせん』。東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録』浮世絵版画篇上(1974年)図版514。
- (13) 山下重民「新撰百工図解一造竈工」『風俗画報』227号(1901年)5・6頁。
- (14) 中村惕斎『増補頭書訓蒙図彙大成』巻十(元禄8年, 1695)十九葉オモテ。
- (15) 喜田川守貞『守貞謄稿』巻之六(嘉永6年序, 1853), 喜田川守貞『近世風俗志(一)』(岩波文庫, 1996年)299頁。
- (16) 注2に同じ。
- (17) 「享保十九年京娣川座評判記」(享保19年, 1734), 歌舞伎評判記集成研究会編『歌舞伎評判記集成』別巻(1977年)205頁。
- (18) 奥村政信(画)「絵本金竜山浅草千本桜」(享保末頃), 日野龍夫・中村幸彦編『新編稀書複製会叢書』第36巻(1991年)206頁。
- (19) 西村重長「風流三幅対(やまとちゃ)」(延享・寛延頃), 小林忠『師宣と初期浮世絵』(日本の美術363, 1996年)74頁。お休み所・お煎じ茶の例としては, 青楼白馬『大強化羅敷』(安永8年, 1779), アダム・カバット『ももんがあ対見越入道』(2006年)129頁。東里山人『浮世街道教速解』上巻(文化13年, 1816), 早稲田大学図書館蔵。為永春水『松之調』三編下(天保12年, 1841), 村上静人編『清談松之調・仮名文章娘節用』(人情本刊行会第17回, 1925年)183頁。
- (20) 注15前掲書巻之五, 216頁。
- (21) 菊岡沾涼『本朝世事談綺』巻之二(享保18年, 1733), 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第2期第12巻(1974年)467頁。「【隠元薬罐】相伝ふ, 隠元禪師形をこのみて作らしめ, 常に炉におかれけると也。或説に, 湯気薬罐といふなり。罐子の蓋をさりて, その跡へ薬罐を居て, 下の茶の湯気を以て, 上の素湯の沸事を工夫して, 是を湯気薬罐と名付くと也。」菊岡自身は湯気薬罐と隠元薬罐は同一の形状・用途のものと考えていたのではないと思われる。筆者がその誤解を継承してしまった。

なお、十返舎一九はこの湯気薬罐をただ「薬罐」とのみ表記する。江戸期に「湯気薬罐」という名称がどこまで一般的であったかは不明である。十返舎一九『方言修行金草鞋』第13編(文政3年, 1820), 大橋新太郎編『一九全集』(1900年)976頁。「毎晩家へ帰りますと, 首の損ぬ様にと存じまして, 首は抜いて仕舞ておきますが, 今朝出かけにつひ首を忘れて出ました処が……

それから首を家にとりにかへりまして狼狽へて首を間違へ、茶釜の上にあった薬罐をとって首と思って、胴へちゃんと載けて、薬罐頭で出かけますと……」

- (22) 五柳亭徳升『春霞ゆるしの廊』巻二(天保3年, 1832), 国立国会図書館蔵
- (23) 笠亭仙果『犬の草紙』四篇(嘉永2年, 1849), 大阪府立中之島図書館蔵
- (24) 『女清玄二見桜』(宝暦10年, 1760)9葉ウラ, 東京学芸大学国語教育学科古典文学第六研究室『江戸時代の児童読物の中心となった赤本・黒本・青本の調査内容分析と翻刻研究』(1987年)315頁。
- (25) 表2に使用した資料の出典は以下の通りである。

[明和①期]

- 1. 作者不詳『新文字絵づくし』, 日野龍夫・中村幸彦編『新編稀書複製会叢書』第5巻(1989年)179頁
- 2. 二世八文字自笑『新版絵入今昔九重桜』, 国立国会図書館蔵
- 3. 都の錦『新版絵入風流日本莊子』巻3, 早稲田大学図書館蔵
- 4. 著者不詳『絵本軽口福笑』, 武藤禎夫編『嘶本大系』第17巻(1979年)14頁
- 5. 鈴木春信(画)『絵本江戸土産』巻中2葉, 山田清作編『江戸土産』(1920年, 稀書複製会第2期第3, 23回)
- 6. 5文献, 『絵本江戸土産』巻下3葉
- 7. 富川房信『鶴亀大島台』, 早稲田大学図書館蔵
- 8. 『福自髪 山の神由来』, 近世文学研究「叢」の会編『叢』第19号(1997年)146頁

[明和②期]

- 9. 森島中良『寸錦雑綴』所収, 日本随筆大成編集委員会編『日本随筆大成』第1期第4巻(1975年)189頁
- 10. 鳥居清経(画)『万歳天狗面』14葉ウラ, 近世文学研究「叢」の会編『叢』第11号(1988年)173頁
- 11. 『富士箱根曾我旧跡』上巻, 近世文学研究「叢」の会編『叢』第13号(1990年)170頁
- 12. 『江島児淵』上巻2葉オモテ, 小池正胤・叢の会編『江戸の絵本』I(1987年)108頁
- 13. 佐藤要人『江戸水茶屋風俗考』(1993年)167頁
- 14. 大道寺宣布『新版龍都朧夜語』, 『読本研究』第2輯(1988年)70頁
- 15. 鳥居清経(画)『昔嘶祖父と婆々』上巻, 近世文学研究「叢」の会編『叢』第13号(1990年)97頁
- 16. 鳥居清経(画)『昔嘶祖父と婆々』中巻, 東洋文庫蔵
- 17. 富川房信(画)『あはは太郎三代菅笠』下巻1ウラ, 『大東急記念文庫

- 善本叢刊』第4巻186頁
18. 鳥居清経(画)『やかんべえ』(黒本), 早稲田大学図書館蔵
〔安永期〕
19. 定延『世間用心記』巻1, 国立国会図書館蔵
20. 鳥居清経(画)『分福茶釜功葉罐平』, 近世文学研究「叢」の会編『叢』
第18号(1996年)162頁
21. 北尾重政(画)『遊色妹背種』中巻, 林美一編『重政』(江戸艶本集成
第4巻, 2013年)92・93頁
22. 鳥居清経(画)『女那二代鉢木』, 国立国会図書館蔵
23. 南鐙堂一片『寸南破良意』, 洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』
第6巻(1979年)338頁
24. 糟喰人月風『管巻』, 武藤禎夫編『嘶本大系』第11巻(1979年)43頁
25. 松壽軒東朝『当世穴千鳥』, 尾崎久弥編『洒落本集成』第3集(1930
年)25頁。洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』第7巻(1980年)145頁
26. 市場通笑『絵本虚言弥二郎傾城誠』下冊3巻, フジミ書房『黄表紙
市場通笑集』第1巻(2006年)110頁
27. 北尾重政『木兎の音色』上巻, 林美一編『重政』(江戸艶本集成第4
巻, 2013年)275頁
28. 青楼白馬『大強化羅敷』, アダム・カバット『ももんが対見越入道』
(2006年)129頁
29. 市場通笑『大通人穴扒』, 国立国会図書館蔵
30. 芝全交『時花兮鶉茶曾我』中冊, 小池正胤ほか『江戸の戯作絵本』
(一)(1980年)168頁
31. 市場通笑『近頃嶋めぐり』上巻, 国立国会図書館蔵
〔A群〕
32. 小学館『浮世絵聚花』補巻2(1982年)158頁図版562。千葉市美術館カ
タログ『鈴木春信』(2002年)図版242
33. 32小学館文献159頁図版573
34. 32千葉市美術館カタログ図版241
35. 坂戸弥一郎『浮世絵大家集成』第5巻(1931年)第5図
36. 東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 浮世絵版画篇上冊』
(1960年)図版581
37. 32千葉市美術館カタログ240頁図版247
38. 小学館『浮世絵聚花』第12巻(1980年)196頁図版16
39. 35文献第41図
40. 36文献図版537
41. 32小学館文献147頁図版482。野口光次郎『鈴木春信』(1929年)第55図

42. 吉田咲二『日本版画美術全集』第3巻(1961年)87頁図版53
43. 藤沢紫監修『鈴木春信決定版』(別冊太陽, 2017年)81・82頁
44. 小学館『浮世絵聚楽花』第14巻(1981年)205頁図版320-3。(公財)平木浮世絵財団監修『平木浮世絵コレクション大全』(2021年)98頁図版89
45. 京都国立博物館カタログ『日本人と茶』(2002年)231頁図版164
46. 坂戸弥一郎『浮世絵大家集成』第8巻(1932年)第11図
47. 座右宝刊行会編『全集浮世絵版画』1(1983年)図版19。吉田咲二編『春信全集』(1942年)131頁図480
48. 32小学館文献図版361

〔B群〕

49. 早稲田大学演劇博物館編『一筆斎文調』(早稲田大学演劇博物館芝居絵図録1, 1991年)37頁図版57
50. 林美一編『春信・湖龍斎』(江戸艶本集成第2巻, 2011年)4頁。林綾野『浮世絵に見る江戸の食卓』(2014年)96頁
51. 36文献図版514
52. 久保田米斎『江戸風俗浮世絵大鑑』第1輯(中)(1916年)
53. 出光美術館編『出光美術館蔵品図録—肉筆浮世絵』(1988年)図版107
54. 檜崎宗重編『秘蔵浮世絵大観』別巻(1990年)単色図版10
55. 東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 浮世絵版画篇中冊』(1964年)図版1356
56. ボストン美術館蔵 浮世絵検索データベースより

〔甲群〕

57. シカゴ美術館蔵 浮世絵検索データベースより
58. 32小学館文献159頁図版572
59. 日野原健司・平野恵『浮世絵でめぐる江戸の花』(2013年)186頁図版146
60. 小学館『浮世絵聚楽花』第11巻(1979年)図版90
61. 稲垣進一『図説浮世絵入門』(1996年)41頁。太田記念美術館カタログ『勝川春章』(2016年)図版96
62. 小学館『浮世絵聚楽花』補巻2(1982年)121頁図版393
63. 田辺昌子『鈴木春信』(2017年)116頁
64. 32小学館文献162頁図版600
65. 54文献単色図版12
66. 原色浮世絵大百科事典編輯委員会編『原色浮世絵大百科事典』第5巻(1980年)

〔乙群〕

67. ボストン美術館蔵 浮世絵検索データベースより

68. 45文献232頁図版165
69. 59文献187頁図版147
70. 安村敏信監修『浮世絵図鑑』（別冊太陽、2014年）32頁
71. 原色浮世絵大百科事典編輯委員会編『原色浮世絵大百科事典』第8巻（1981年）64頁図154
72. 『浮世絵芸術』第98号（1990年）32頁
73. 吉田暎二編『浮世絵大家集成』第6巻（1931年）第25図
74. 54文献カラー図版102
- (26) 三田村鳶魚「笠森稻荷及びお仙茶屋」、『足の向く儘』（鳶魚江戸文庫28、1998年）280頁。
- (27) 新藤茂「役者似顔絵～春信・春章・文調そして笠森お仙～」、太田記念美術館カタログ『勝川春章』（2016年）166・167頁。
- (28) 笠亭仙果「雪月花三遊新話」初編上（明治12年、1879）見返し、同4葉ウラ・5葉オモテ
- (29) 柳水亭種清「艶娘毒蛇淵」2編（明治13年、1880）、早稲田大学図書館蔵
- (30) 一竿斎宝洲「神經開化怪談」第1号（明治17年、1884）、国文学研究資料館「リプリント日本近代文学」1、2005年、34頁。
- (31) 森銑三『明治東京逸聞史』1（東洋文庫135、1969年）364頁。
- (32) 山東京伝（画）「名取菊黄白長者」（安永8年、1779）、国立国会図書館蔵
- (33) マニー・ヒックマン『浮世絵聚花』第2巻（1985年）図版12
- (34) 山東京伝「廓中丁子」（天明5年、1785）巻5三葉ウラ・四葉オモテ、山東京伝全集編輯委員会編『山東京伝全集』第1巻、1992年、174頁。
- (35) 瀧亭鯉丈「和合人」二編上巻（文政・天保期）（古谷知新『滑稽文学全集』第5巻、1918年）278頁。
- (36) 国立国会図書館蔵・早稲田大学図書館蔵
- (37) 西沢一鳳「茶店中宿」（『皇都午睡』三編中之巻所収、嘉永2年、1850）、国書刊行会編『新群書類従』巻1（1906年）716頁。
- (38) 京都府内務部「京の華」（大正15年）、新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』第9巻（1986年）所収、343頁。
- (39) 秋里籬島「拾遺都名所図会」中冊巻2（天明7年、1787）、京都叢書刊行会編『京都叢書』第43巻（1916年）所収、100頁。
- (40) 秋里籬島『東海道名所図会』巻1（寛政9年、1797）、国立国会図書館蔵
- (41) 笠亭仙果『美目与里草紙』二編扉絵（弘化4年、1847）、大阪府立中之島図書館蔵
- (42) 『淀川兩岸一覽』（文久元年、1861）
- (43) 蒔絵師源三郎『人倫訓蒙図彙』巻6（元禄3年、1690）。『合類日曜料理抄』巻1（元禄12年、1699）にも祇園の香煎の詳しい処方が見える。

- (44) 注38前掲書に同じ。事実、唐辛子と香煎を取り違える滑稽話が存する。梅亭金鶯「七偏人」初編巻中(文久3年, 1863), 古谷知新『滑稽文学全集』第5巻(1918年)400頁。

なお、ここに言う陶製の小壺の画像かと思われるものがある。歌川広重「武州杉田の梅林」(嘉永5年, 1852), 永田生慈編『日本の浮世絵美術館』巻2(1996年)60・61頁。

- (45) 注15前掲書巻之6, 265頁。

- (46) 「東海道駅路の鈴」巻1(宝永6年, 1709), 『近世風俗・地誌叢書』第1巻(1996年)36頁。

形が明瞭な例を一部列挙する。

元文2年(1737)―西川祐信「絵本珍口記」, 太平主人編『西川祐信風俗絵本六種』(2002年)174頁。

宝暦13年(1763)―鈴木春信「絵本古金襴」巻2, 藤沢紫『鈴木春信絵本全集』影印篇1(2000年)277頁。

明和・安永年間―勝川春章「品川百景 ハツ山の秋月」, 原色浮世絵大百科事典編輯委員会編『原色浮世絵大百科事典』第5巻(1980年)58頁図188

天明3年(1783)頃―勝川春章「婦女風俗十二か月図より四月杜鵑図」, 小林忠編『肉筆浮世絵大観』第4巻(1997年)図版51

寛政4年(1792)頃―細田栄之「絵馬堂」, 橋口清編『浮世風俗やまと錦絵』錦絵全盛時代中巻(1918年)第7葉

文化11年(1814)―合川珉和『漫画百女』23葉ウラ, 小泉吉永編『江戸時代庶民文庫』第5巻(2012年)62頁。

文政・天保年間―瀧亭鯉丈「和合人」2編序, 古谷知新『滑稽文学全集』第5巻(1918年)278頁。

- (47) 山東京山『教草女房形気』二編上(弘化3年, 1846), 大阪府立中之島図書館蔵

- (48) 歌川国芳「江戸名所草木づくし 品川八景坂のもみぢ」(天保・弘化年間), たばこと塩の博物館『浮世絵版画』図録編第2部(2011年)129頁。

- (49) 為永春水『西国奇談』8編上(安政6年, 1859)3葉オモテ, 早稲田大学図書館蔵

- (50) 悪茶利道人『富貴地座位』中巻茶之部(安永6年, 1777), 国立国会図書館蔵

- (51) 伊庭可笑『通風伊勢物語』(天明2年, 1782), 国立国会図書館蔵

- (52) 鳥居清長『浅草金竜山八境・柳屋』(天明・寛政期), 東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録 浮世絵版画篇中冊』(1964年)図版1449。

- (53) 三田村鳶魚『江戸の女』(青蛙房, 1956年)291頁。これは注36に引用した

『皇都午睡』の「娘・女房は奇麗に拵へ、客毎に始めは素湯に香煎を入れ出て、次にお煮花として相応の茶を汲み出て、客あしらひは世事よく誠に馴れたる物なり。」によるものかと思われる。

- (54) 石田有年編『都の魁』下(明治16年, 1883), 新撰京都叢書刊行会編『新撰京都叢書』第6巻(1985年)所収, 332頁。
- (55) 三遊亭圓朝「鶴殺疾刃包丁」第4章(明治20年, 1887), 山田俊治他校注『圓朝全集』第4巻(2013年)152頁。
- (56) 長崎市教育委員会『唐人屋敷跡』(2013年)21・37頁。炬粕町遺跡からも17世紀後半から18世紀初めのものが出土しているが、横手か後ろ手かは判然としない。長崎県教育委員会『長崎奉行所〈立山役所〉跡・岩原目付屋敷跡・炬粕町遺跡』(2005年)77頁。
- (57) 扇浦正義「唐人屋敷建設期の貿易陶磁—1680年代を中心とした陶磁器流通」, 佐々木達夫編『中世陶磁器の考古学』第4巻, 2016年, 96・97頁。
- (58) 梅廼屋鶴子編『絵本三都名所一覽』15葉ウラ, 国立国会図書館蔵
- (59) 『休息百人一首』喜撰法師(明和6年, 1769), 小泉吉永編『江戸時代庶民文庫』第1巻, 2012年, 11頁。
- (60) 三代吉文字屋市兵衛『女芸文三才図会』五編(明和8年, 1771), 小泉吉永編『江戸時代庶民文庫』第1巻, 2012年, 501頁。
- (61) 早稲田大学図書館蔵
- (62) 国立国会図書館蔵
- (63) 四世鶴屋南北「浮世柄比翼稲妻」三幕目(文政6年, 1823)市村座, 渥美清太郎編『日本戯曲全集』第12巻, 1921年, 526頁。
- (64) 深沢秋男『井関隆子日記』上巻(1978年)16頁。
- (65) 愛知県陶磁資料館『煎茶とやきもの』(2000年)102・103頁。
- (66) 上海申報館『点石齋画報』(光緒10~24年, 1884~1898)
- (67) 注66文献より, 安徽一甲~戊集, 丁六の四十五葉オモテ, 蘇州一己~癸集, 壬三の十九葉オモテ, 秣陵一甲~戊集, 丙五の三十三葉オモテ, 湖州一戊集, 戌一の六葉オモテ, 粵東一亥集, 亥二の九葉オモテ, 上海一甲~戊集, 甲二の九葉ウラ, 己~亥集, 壬七の四十九葉オモテ
- (68) 全国図書館分館文献開発中心編『清代報刊図画集成』第5冊(2001年)80頁, 同じく第6冊448頁, 全国図書館文献縮微複製中心編『清末民初報刊図画集成』続編第19冊(2003年)8475頁。
- (69) 広東省立中山図書館編『旧粵百態—広東省立中山図書館蔵晚清画報選輯』(2008年)45頁。
- (70) 孫伯醇ほか編『清俗紀聞』1(東洋文庫62, 1966年)68頁。
- (71) 長崎市教育委員会『勝山町遺跡』(2003年)65頁図版30。稲垣正宏「遺跡出土の煎茶道具—西日本」『野村美術館紀要』第16号(2007年)No.57

- (72) 板橋区立郷土資料館カタログ『長崎唐人貿易と煎茶道』(1996年)カラー図版51, モノクロ図版69-2
- (73) 森達也「清朝輸出陶瓷の生産地について」『陶説』734号(2014年)42頁。
- (74) 『日本経済大典』第四(1966年)302・303頁。